

B：宮城県コース

藤井 久実代（2007・国際）

震災後、私が宮城県に向かうのは2回目である。このツアーのちょうど1年前、支援委員の視察として訪れた。津波の被害が大きかった沿岸部は未だ何もなく、がらんとしていた。時間が止まっているように思った。しかし、校友の皆様、特に事業を行っており、社屋や生産施設を失った方々の表情は変わっていた。前を向き、進んでおり、笑顔もあった。

前回のレポートでも書いたことだが、はたして自分は目の前の壁、困難に立ち向かっていこうと努力したか、逃げていなかったか、改めて問い直した。このツアーには、東北三県の校友も参加していた。自らも被災した方々が他県の現状を学びたいとのことだった。我々は『東北』とまとめて読んでいるが、各県被災状況は違うようだ。特に、福島から参加いただいた校友の表情は違った。前に進みたくても進めない。復興しようとしても復興できない。地震からの復興は、地震大国にいる限り、経験者も多く、また自分もいつ経験するかわからない。しかし、福島原発事故は誰も経験したことのないことであり、我々同じ日本人として前進の方法を一緒に考えなければならぬと思った。